

初対面二者間会話における話題導入と展開のプラクティス：対話相手との年齢差・性差に着目して

著者	宇佐美 まゆみ, 野口 茉美, 木林 理恵
雑誌名	人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会
巻	71
ページ	23-28
発行年	2014-09-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00003595/

doi: 10.11517/jsaislud.71.0_04

初対面二者間会話における話題導入と展開のプラクティス —対話相手との年齢差・性差に着目して—

The practice of topic introduction and its development in Japanese dyadic
conversation between new acquaintances

-Focusing on the differences of age and gender between speakers-

宇佐美まゆみ¹ 野口芙美² 木林理恵³

Usami Mayumi¹, Noguchi Fumi², and Kibayashi Rie³

¹ 東京外国語大学大学院

¹ Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

² 早稲田大学日本語教育研究センター

² Center for Japanese Language, Waseda University

³ 日本学生支援機構

³ Japan Student Services Organization

Abstract: The present study examined the topic introduction and its development in Japanese dyadic conversation between new acquaintances. In order to examine how the practice of topic introduction and its development might vary depending on the interlocutors' perceived age and gender, we examined the conversation data in which three base subjects were asked to interact with six different partners who differ in age and gender. The main results are as follows.

- 1) The older speaker introduces topics more frequently in general.
- 2) The older speaker introduces hearer-oriented topics in relatively higher rate than speaker-oriented topics.
- 3) The speaker and interlocutor collaboratively develop a topic regardless of age and gender relationship between speakers.
- 4) There are four sub-categories in 'topic development,' that is, 'delving,' 'focusing,' 'clarifying' and 'co-constructing.'
- 5) 'Delving' is observed most frequently within the four types of 'topic development.'
- 6) Incomplete utterances in 'topic development' are used more frequently toward older interlocutors.

These findings can be applied to the study for making more natural utterances and topic-developments, by the computer in a human computer interaction.

1. はじめに

会話における話題に関しては、選択する話題の内容や展開パターンなど様々な観点から研究されているが（筒井、2012；三牧、2013）、話者の年齢差や性差に着目した研究は多くはない。本研究では、社会人の初対面二者間会話における話題内容の特徴と、その導入・展開のプラクティスがどのようになっているのかを、対話相手の年齢・性が統制された自然会話データに基づいて、定量的、定性的両面から分析した。

2. 方法

文字化の方法は、「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」（宇佐美、2007、最新版は、宇佐美、2011）に従っている。また、文字化の整備、分析結果の集計には、「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2012年改訂版）」（宇佐美、2012）を用いた。

2.1. 会話データ

35歳前後のベース話者（女性）に、同性、及び、異性

の「年上 (45 歳)」「同等 (35 歳)」「年下 (25 歳)」の計 6 通りの相手を組み合わせて収集した「初対面二者間会話データ」(Usami, 2002)のうち、ベース話者 3 名分の 18 会話について、初対面の会話の特徴がよく現れる冒頭の 3 分間、約 54 分 (総発話文数 1684) を分析した。

2.2. 分析方法

一発話文ごとに、以下の観点からコーディングを行い、各々の頻度と割合を算出した¹。

① 話題導入

ローカルな話題について話す最初の機会となる発話文 (Usami, 2002)。以下の例 1。

例 1 (自己紹介の後で)

話者 お仕事は何をしてらっしゃるんですか?。←

② 話題展開

ローカルな話題 (話題導入から次の話題導入まで)の中で、話題導入発話に対する反応に留まることなく、話の展開に寄与した発話文。次の「③話題展開のタイプ」のところを挙げる。

③ 話題展開のタイプ

「A.掘下げ」、「B.焦点化」、「C.具体化」、「D.共同発話文」の 4 つに分類した。「掘下げ」は話し手志向、「焦点化」、「具体化」、「共同発話文」は聞き手志向である。

A.掘下げ: 話し手自身が、ある話題についてさらに説明をしたり、付け加えたり、それを足掛かりに他の話題を展開したもの。

例 2 (質問に「国文学を教えている」と答えた後で)

話者 近代、文学って、言いまして、明治以降のなんですけど。←

B.焦点化: 聞き手が、話し手の発話の一部分にフォーカスすることで、話し手が話題を展開するきっかけとなったもの。

例 3 (相手が雑誌に記事を書くことを聞いて)

話者 1 雑誌に。←

話者 2 女性誌なんですけど (略)

(話者 1 の発話によって、話者 2 が雑誌の種類情報を新たに付け加える展開)

C.具体化: 聞き手が、話し手の発話を受けて、それについて別の観点からより具体的なことを述べたもの。

例 4 (相手が、自分によく領くと言ったことを受けて)

話者 きっと聞き上手でいらっしゃるんじゃないですか?。←

D.共同発話文: 聞き手が、話し手の発話を引き取って、文法的につながるように述べたもの。

例 5 (あるビデオの話について)

話者 1 昭和の歴史の…、ニュース映像みたいな…。

話者 2 へー、ビデオ。←

(ニュース映像みたいなビデオ、という 1 つの発話文になる)

④ 話題志向

①の話題導入、②の話題展開の発話文については、その発話文が「話し手志向」(例 2)か「聞き手志向」(例 3)かをコーディングした。

例 6 話し手志向 (挨拶の後で)

話者 私はずっと東京生まれの東京育ちなんですけども…。←

例 7 聞き手志向 (対話相手が既婚と聞いて)

話者 お子さんとかもいらっしゃるんですか?。←

⑤ 文の完結性

①の話題導入、②の話題展開の発話文については、話題導入や展開の文が、どのような形でなされているのかも分析するために、発話文が完結していれば「完結型発話」とし、不完全な形や、一語文等で言い淀みがあったものは「中途終了型発話」としてコーディングを行った。

例 8 (挨拶の後で)

話者 えー、少し涼しくなりましたね。←完結型発話

例 9 (自己紹介の後で)

話者 二年目でして、まだ、まだまだ…。←中途終了型発話

3. 結果と考察

以下に各項目の分析結果を示す²。

3.1. 話題導入発話

各会話における話題導入発話の頻度と割合を、ベース話者 3 名のものを表 1 に、対話相手のものを表 2 に示した。

表 1 話題導入発話の頻度と話者ごとの項目の総計に占める割合 (ベース話者)

		話題導入 占める割合 (ベース話者)		
		話題導入 頻度 (%)	その他 頻度 (%)	計 頻度 (%)
対	同性	11 (6.6%)	156 (93.4%)	167 (100.0%)
	目上 異性	12 (8.5%)	130 (91.5%)	142 (100.0%)
対	同性	5 (3.7%)	131 (96.3%)	136 (100.0%)
	同等 異性	13 (8.7%)	136 (91.3%)	149 (100.0%)
対	同性	25 (13.6%)	159 (86.4%)	184 (100.0%)
	目下 異性	16 (12.6%)	111 (87.4%)	127 (100.0%)

表 2 話題導入発話の頻度と話者ごとの項目の総計に占める割合 (対話相手)

		話題導入 占める割合 (対話相手)		
		話題導入 頻度 (%)	その他 頻度 (%)	計 頻度 (%)
目上	同性	21 (13.0%)	141 (87.0%)	162 (100.0%)
	異性	18 (11.9%)	133 (88.1%)	151 (100.0%)
同等	同性	20 (14.5%)	118 (85.5%)	138 (100.0%)
	異性	13 (9.7%)	121 (90.3%)	134 (100.0%)
目下	同性	14 (8.1%)	158 (91.9%)	172 (100.0%)
	異性	8 (8.6%)	85 (91.4%)	93 (100.0%)

¹ コーディングについては、評定者間信頼性係数 (Cohen's Kappa) を算出し、全て $\kappa=0.7$ 以上であることを確認した。

² 聞き取れない部分があった発話は、集計に含めていない。

年齢差がある会話では、目上の話者の話題導入の頻度が高い傾向にある。同等の異性間の会話では、話題導入頻度に話者間の差はないが、同等女性同士の会話では、両者に差がある。次の話題導入発話の話題志向性でわかるように、対話相手の同等女性が、聞き手志向の導入を多く行ったためである。

3.1.a 話題導入発話の話題志向性

次に、各会話における話題導入発話の話題志向の頻度と割合を、ベース話者3名のものは表3に、対話相手のものは表4に示す。

表3 話題導入発話の話題志向の頻度と割合
(ベース話者)

		話し手志向	聞き手志向	計
		頻度(%)	頻度(%)	頻度(%)
対	同性	7(63.6%)	4(36.4%)	11(100.0%)
目上	異性	8(66.7%)	4(33.3%)	12(100.0%)
対	同性	4(80.0%)	1(20.0%)	5(100.0%)
同等	異性	4(30.8%)	9(69.2%)	13(100.0%)
対	同性	10(40.0%)	15(60.0%)	25(100.0%)
目下	異性	5(31.3%)	11(68.8%)	16(100.0%)

表4 話題導入発話の話題志向の頻度と割合
(対話相手)

		話し手志向	聞き手志向	計
		頻度(%)	頻度(%)	頻度(%)
目上	同性	3(13.6%)	19(86.4%)	22(100.0%)
	異性	5(27.8%)	13(72.2%)	18(100.0%)
同等	同性	3(15.0%)	17(85.0%)	20(100.0%)
	異性	6(46.2%)	7(53.8%)	13(100.0%)
目下	同性	2(14.3%)	12(85.7%)	14(100.0%)
	異性	1(12.5%)	7(87.5%)	8(100.0%)

年齢差がある会話においては、目上の話者が、聞き手志向の話題を導入する傾向にある。同等同士の会話の場合、異性間の会話では、話し手志向も聞き手志向もほぼ同数となっているが、同等女性同士の会話では、ベース話者は話し手志向の導入発話が多く、対話相手は聞き手志向の導入発話の割合が高い。ベース話者に関する話題の導入が多かったことによる。

3.1.b 話題導入発話の文の完結性

話題導入発話の文の完結性についての結果を、ベース話者のものを表5に、対話相手のものを表6にまとめた。

表5 話題導入発話の文の完結性の頻度と割合
(ベース話者)

		完結型	中途終了型	計
		頻度(%)	頻度(%)	頻度(%)
対	同性	6(54.5%)	5(45.5%)	11(100.0%)
目上	異性	8(66.7%)	4(33.3%)	12(100.0%)
対	同性	1(20.0%)	4(80.0%)	5(100.0%)
同等	異性	10(76.9%)	3(23.1%)	13(100.0%)
対	同性	15(60.0%)	10(40.0%)	25(100.0%)
目下	異性	15(93.8%)	1(6.3%)	16(100.0%)

表6 話題導入発話の文の完結性の頻度と割合
(対話相手)

		完結型	中途終了型	計
		頻度(%)	頻度(%)	頻度(%)
目上	同性	15(68.2%)	7(31.8%)	22(100.0%)
	異性	17(94.4%)	1(5.6%)	18(100.0%)
同等	同性	15(75.0%)	5(25.0%)	20(100.0%)
	異性	12(92.3%)	1(7.7%)	13(100.0%)
目下	同性	7(50.0%)	7(50.0%)	14(100.0%)
	異性	4(50.0%)	4(50.0%)	8(100.0%)

話題導入発話の文の完結性について、中途終了型発話の割合を見ると、平均すると、ベース話者が38.0%、対話相手が28.3%で、約3割を占めている。特に、目下にあたる対話相手は、女性、男性ともに、50%が中途終了型発話になっており、話題を導入する際、目上の相手に対して、明確な形で質問することを避けている様子が窺える。また、中途終了型発話は、以下の例10のように、相手に対して聞きにくい質問をするときにも行われており、中途終了型発話がポライトネス機能を持っていることがわかる。

以下の例10は、ベース話者BF01と目下異性のYM01の会話である。YM01は、BF01が自分と同じくらいの年齢ではないかと感じたが、年齢をはっきりと質問することは失礼になる場合があるので、中途終了型発話で行っている。

例10 BF01の年齢について

発話文番号 ³	話者	発話内容	完結性
52	YM01	/少し間/あら、お年はやっぱ20代、半ばの…?[一]	中途終了型
53	BF01	あっ、もつと…。	
54	YM01	あっ、あ、そうなんですか<笑い>…、もつと…、[無声化して、驚いているように]あはは<笑い>。	

³ 「発話文番号」の振り方についてと、記号凡例については、最後の凡例のところを参照されたい。

3.2. 話題展開発話

次に、話題展開発話の結果を考察する。各会話は、総じてある話題が導入された後すぐに別の話題が導入されるのではなく、一つの導入された話題について、相互に展開させる形で進んでいる。各会話における話題展開の頻度と割合を、ベース話者3名のものを表7に、対話相手のものを表8に示した。

表7 話題展開発話の頻度と話者ごとの項目の総計に占める割合（ベース話者）

		話題展開		
		頻度 (%)	その他	計
対	同性	44 (26.3%)	123 (73.7%)	167 (100.0%)
	異性	42 (29.6%)	100 (70.4%)	142 (100.0%)
目上	同性	40 (29.4%)	96 (70.6%)	136 (100.0%)
	異性	48 (32.2%)	101 (67.8%)	149 (100.0%)
対	同性	49 (26.6%)	135 (73.4%)	184 (100.0%)
	異性	32 (25.2%)	95 (74.8%)	127 (100.0%)

表8 話題展開発話の頻度と話者ごとの項目の総計に占める割合（対話相手）

		話題展開		
		頻度 (%)	その他	計
目上	同性	46 (28.4%)	116 (71.6%)	162 (100.0%)
	異性	38 (25.2%)	113 (74.8%)	151 (100.0%)
同等	同性	50 (36.2%)	88 (63.8%)	138 (100.0%)
	異性	39 (29.1%)	95 (70.9%)	134 (100.0%)
目下	同性	41 (23.8%)	131 (76.2%)	172 (100.0%)
	異性	20 (21.5%)	73 (78.5%)	93 (100.0%)

年齢差がある会話でも、同等同士の会話でも、話題展開発話の頻度にはあまり差がない。一度導入された話題について、話し手、聞き手双方が展開させる傾向にあると言える。

3.2.a 話題展開発話の話題志向性

次に、話題展開発話の話題志向の頻度と割合を、ベース話者3名のものを表9に、対話相手のものを表10に示す。

表9 話題展開発話の話題志向の頻度と割合（ベース話者）

		話題志向		
		話し手志向	聞き手志向	計
対	同性	36 (81.8%)	8 (18.2%)	44 (100.0%)
	異性	33 (78.6%)	9 (21.4%)	42 (100.0%)
目上	同性	32 (80.0%)	8 (20.0%)	40 (100.0%)
	異性	22 (45.8%)	26 (54.2%)	48 (100.0%)
対	同性	31 (63.3%)	18 (36.7%)	49 (100.0%)
	異性	18 (56.3%)	14 (43.8%)	32 (100.0%)

表10 話題展開発話の話題志向の頻度と割合（対話相手）

		話題志向		
		話し手志向	聞き手志向	計
目上	同性	13 (28.3%)	33 (71.7%)	46 (100.0%)
	異性	15 (39.5%)	23 (60.5%)	38 (100.0%)
同等	同性	17 (34.0%)	33 (66.0%)	50 (100.0%)
	異性	20 (51.3%)	19 (48.7%)	39 (100.0%)
目下	同性	21 (51.2%)	20 (48.8%)	41 (100.0%)
	異性	12 (63.2%)	7 (36.8%)	19 (100.0%)

話題展開においても、話題導入と同様、年齢差のある会話では、目上の話者が聞き手志向の発話を行う割合が高い傾向にある。同等同士の会話は、異性間の会話では、双方の割合にあまり差がないが、同等女性同士の会話では、ベース話者が話し手志向、対話相手が聞き手志向の展開発話を行う頻度が高く、ベース話者に関する話題を展開させるものが多かったことがわかる。

3.2.b 話題展開発話の文の完結性

次に、話題展開発話の文の完結性の頻度と割合を、ベース話者のものを表11に、対話相手のものを表12にまとめる。

表11 話題展開発話の文の完結性の頻度と割合（ベース話者）

		完結性		
		完結型	中途終了型	計
対	同性	26 (59.1%)	18 (40.9%)	44 (100.0%)
	異性	29 (70.7%)	12 (29.3%)	41 (100.0%)
目上	同性	28 (70.0%)	12 (30.0%)	40 (100.0%)
	異性	37 (77.1%)	11 (22.9%)	48 (100.0%)
対	同性	39 (79.6%)	10 (20.4%)	49 (100.0%)
	異性	27 (87.1%)	4 (12.9%)	31 (100.0%)

表12 話題展開発話の文の完結性の頻度と割合（対話相手）

		完結性		
		完結型	中途終了型	計
目上	同性	38 (82.6%)	8 (17.4%)	46 (100.0%)
	異性	31 (83.8%)	6 (16.2%)	37 (100.0%)
同等	同性	29 (58.0%)	21 (42.0%)	50 (100.0%)
	異性	31 (79.5%)	8 (20.5%)	39 (100.0%)
目下	同性	20 (50.0%)	20 (50.0%)	40 (100.0%)
	異性	9 (47.4%)	10 (52.6%)	19 (100.0%)

話題展開発話の場合も、中途終了型発話の割合は、平均すると、ベース話者が26.1%、対話相手が33.1%と、約3割くらいであるが、その割合は、対目上が最も高く、ついで対同等、対目下の順になっている。

		い>んー[話をどうもっていこうか困ったように]。	
56	BF02	プロポーズするときとかー。	具体化
57	SM01	ええ。	
58	BF02	こー、誘うときとかしゃべらなきゃだめなんじゃないですか? [「か」小声]。	具体化
59	SM01	そう、誘いますよ。	
60	BF02	どうするんですか?、<笑いながら> 頷いてるだけじゃだめじゃないですか<笑いながら>。	具体化

4. まとめ

結果をまとめると以下の通りである。①話題導入頻度は、目上の話者が高い。②目上の話者には相対的に聞き手志向の話題導入、展開が多い。③話題展開は、対話相手の年齢にかかわらず、話題に応じて双方が展開させる傾向にある。④「話題展開」においては、中途終了型発話は、対目上に対して最も多く、対目下、対同等、対目上の順に話者ごとの項目の総計における割合が高くなる。⑤展開のタイプは、「掘下げ」「焦点化」「具体化」「共同発話文」の4タイプある。⑥展開タイプについては、平均すると「掘下げ」が約5割で最も多い。初対面という会話の特徴もあり、自らの発話に新しい情報を加えて話題を展開していく場合が多いからと考えられる。

これらの知見は、対話ロボット教育に生かせる面もあるだろう。例えば、対目上の会話でより多く見られた「中途終了型発話」は、よりシンプルな短い表現によって、丁寧な効果をあげる方法として利用することができる。また、話題展開のタイプとパターンを記憶させることによって、特に、初対面の相手との雑談のような目的が明確でない会話においても、実際の自然会話に近いやりとりを実現させることにつながられると思われる。

トランスクリプトの記号凡例

(宇佐美 2007 より一部抜粋し、説明を簡略化した)

発話文番号の振り方：「発話文」の数がわかるように、1つの発話文につき1つの番号を割り当てる。ただし、1発話文の途中で話者交替があって改行された場合には、該当する一連のラインに同じ発話文番号をつけ、その1発話文内における各ラインの順番がわかるように、その中で通し番号をつける(例11の発話文番号16-1、16-2、17-1、17-2がこれに当たる)。

- 。 1発話文の終わりにつける。
- 、 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつける。
- 、 ①1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。

- ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ? 疑問文につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いて表す。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
- < >{ } 同時発話は、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{ }をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{}をつける。
- [] 文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、特記の必要があるものなどを[]に入れて記す。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に<笑いながら>などのように説明を記す。

参考文献

- [1] 宇佐美まゆみ、嶺田明美: 対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン: 初対面二者間の会話分析より, 名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集2, 名古屋学院大学留学生別科(日本研究プログラム), 130-145 (1995)
- [2] Usami Mayumi.: Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Hituzi Syobo, pp. 1-343 (2002)
- [3] 宇佐美まゆみ: 相互作用と学習, 講座社会言語科学4 教育, ひつじ書房, 150-181 (2008)
- [4] 宇佐美まゆみ: 改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日版, 多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究, 平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書, 4-21 (2007)
(最新版は <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>, (2011)である)
- [5] 宇佐美まゆみ: BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2012年改訂版), 自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究, 平成23年度-26年度科学研究費補助金基盤研究(A)- (課題番号 23242027) 研究成果, (2012)
- [6] 筒井佐代: 雑談の構造分析, くろしお出版, 1-368 (2012)
- [7] 三牧陽子: ポライトネスの談話分析 —初対面コミュニケーションの姿としくみ, くろしお出版, 1-314 (2013)